|  |
| --- |
| 令和４年度　学校評価報告書加賀市立片山津中学校　校長　山下　悟 |
| 評価の項目 | 1. －１　教育課程・学習指導
 |
| 今年度の重点目標 | 学習サイクルを確立し学習意欲を高める。 |
| 具体的取組 | 各学年と教科担当でその学年にあった家庭学習の取り組み方法を示し、継続して取り組ませる。家庭学習の習慣化を目指し、各種たより、懇談会などの場を通して、家庭における過ごし方（時間の使い方）を含め、保護者の協力を求める。 |
| 担当 | 教務主任・各教科代表 |
| 現状及び取組状況 | 学習習慣が身についている生徒と身についていない生徒の二極化傾向にある。全体でも家庭学習の時間が少ない。 |
| 評価の観点 | （成果指標）　家庭での学習が習慣化した生徒が増えた。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 学習・生活アンケート（生徒㉒）で「家庭での学習時間が１時間以上の生徒」が　A 80%以上になった　　　B 70%以上になった　C 60%以上になった　　　　D 60%未満であった |
| 判定基準（備考） | Dの場合は、取組を再検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **Ｃ（63.6％）** |
| 分析（成果と課題） | １，３年生では72％が１時間以上家庭学習をしているが、２年生では46％と低い。年度当初に確認した家庭学習の意義が薄れていることや毎日の課題が「やってよかった」「授業に生かせた」など前向きな気持ちになれる課題ではないことが考えられる。 |
| 今後の改善策 | ２学期には教員も生徒も宿題の意義をもう一度確認し、その上で保護者と連絡を密にしながら、宿題の取り組み方について学校でも家でも評価したり、宿題の内容を精選したりする。 |
| 集計結果（％）（最終） | **Ｃ（61.1％）** |
| 中間結果との差（％） | **－2.5％** |
| 分析（成果と課題） | １学期に比べ３年生では１０％、２年生では５％ほど１時間以上家庭学習をしている生徒の割合が増えており、学習に意欲的に取り組もうとしている様子が見られる。しかし１年生では１時間以上家庭学習をしている生徒の割合が１５％以上も減っており。「学習内容が理解できない」「授業が難しい」と感じている生徒が多い。 |
| 次年度への改善策 | 教科書の持ち帰りの呼びかけや授業のワークの活用など、家庭学習に取り組みやすい環境づくりを行う。また、１人ひとりの生徒が何を理解し、何を理解できていないのかを丁寧に見取り、生徒の状況にあった課題を工夫していく。 |
|  |
| 評価の項目 | ①－２　教育課程・学習指導 |
| 今年度の重点目標 | 学習サイクルを確立し学習意欲を高める。 |
| 具体的取組 | 生徒の実態を把握し、学び合いに加え、ICTを効果的に活用して、生徒が「わかった・できた・もっと知りたい」と感じる授業実践を行う。また、授業のﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ化および授業規律の徹底と定着を継続する。 |
| 担当 | 研究主任・教務主任 |
| 現状及び取組状況 | 生徒の実態に応じた実践をしているが、さらに生徒の「わかった・できた・もっと知りたい」を引き出す工夫が必要である。 |
| 評価の観点 | （成果指標）授業が分かりやすく、学習意欲が向上した。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 学校評価アンケート（保護者⑧）で「お子さんは授業が分かりやすいと言っている」と、教科アンケート（生徒③）で、「先生の説明や質問、指示はわかりやすかった」が、　A 80%以上になった　B 70%以上になった　C 60%以上になった　D 60%未満であった |
| 判定基準（備考） | 一方でもDの場合は、指導法を再検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **保護者⑧ 1年 76%　B　　2年 63%　C　　3年 59%　D****生徒③ 1年 98%　A　　2年 98%　A　　3年 99%　A** |
| 分析（成果と課題） | 生徒が学校での授業が分かりやすいと感じているところは大いにあるが、一方で保護者はテストの点数で生徒の理解度を把握している部分がこの差に生まれている。 |
| 今後の改善策 | 校内のテストでは、学んだことが点数につながるような生徒に見通しを持たせた、テストの作成を心掛ける必要がある。また、生徒が保護者と家庭で話をする中に授業の話が出るような心に残る授業を展開していく必要がある。 |
| 集計結果（％）（最終） | **保護者⑧ 1年 62%　C　　 2年 53%　D　　3年 72%　B****生徒③ 1年 100%　A　　2年 95%　A　　3年 99%　A** |
| 中間結果との差（％） | **保護者⑧ 1年 -14%　 　　2年 -10%　　 3年 +13%****生徒③ 1年 +2%　　 　 2年 -3%　　　3年 ±0%** |
| 分析（成果と課題） | 1，2年生は学習内容が難しくなることがそのまま、生徒の理解度の低さ、また、保護者への授業への信頼感への低さへとつながっている。3年生は三者懇談で保護者と顔を合わせて話し合う機会が増えたことで、生徒の学習の様子を伝える場面が増えたことが％のアップにつながった。 |
| 次年度への改善策 | ・生徒がわかったと感じる授業の実践・単元計画を生徒と共有し、見通しを持たせる |
|  |
| 評価の項目 | ②　生徒指導　※いじめの未然防止 |
| 今年度の重点目標 | 情報の共有から行動実践へとつながる生徒指導体制を確立する。 |
| 具体的取組 | 「生徒指導委員会・各学年会」や「いじめ問題対策ﾁｰﾑ」において情報を共有し、行動実践をｽﾑｰｽﾞに行うための報・連・相を確立する。また指導体制を確立するために事例検討会(いじめ対応ｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞｰ)や校内研修等を行い、日々の体制の確認をする。 |
| 担当 | 生徒指導主事（生徒指導委員会） |
| 現状及び取組状況 | 情報の共有から指導体制へとスピード感をもって対処・対応ができるように取り組んでいる。 |
| 評価の観点 | （成果指標）情報の共有がなされていたか。情報の共有から方針・指導体制につながったか。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 教職員アンケート（教師㉑）で「問題行動時の組織的対応の体制が整っている」が　A 90%以上の場合　B 80%以上の場合　C 70%以上の場合　D 70%未満 |
| 判定基準（備考） | Dの場合は、方法・内容を再検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **A（９５）％** |
| 分析（成果と課題） | 成果は先生方が意識をもって様々な対応にあたり、情報を共有できていること。課題は生徒保護者への丁寧な対応と目立つ子ではなく目立たない子(不登校への心配)への配慮と情報共有。 |
| 今後の改善策 | ・生徒・保護者へのきめ細やかな対応と保護者への丁寧な連絡体制。・情報の共有。 |
| 集計結果（％）（最終） | **A（100％）** |
| 中間結果との差（％） | **+５％** |
| 分析（成果と課題） | 　成果として生徒指導員会での綿密な情報交換、そして、その情報を各学年にきちんと伝達していただいていること。2学期途中から始めた支援員さんの記録の情報共有も非常に効果的であったので、次年度も継続していく。問題行動の事案についても個人ではなくチームで対応することができてきていると感じる。今後も生徒・保護者へのきめ細やかな対応と家庭連絡、生徒細かな変化を見とることを大切にして、個人ではなく、みんなで対応方策を協議し、対応にあたることを大切にしていく。 |
| 次年度への改善策 | ・生徒・保護者へのきめ細やかな対応と保護者への丁寧な連絡体制。・情報の共有と伝達。・PBSの実践 |
|  |
| 評価の項目 | ③　キャリア教育・進路指導 |
| 今年度の重点目標 | 系統的な指導と、自分の将来を考えた進路選択をする能力・態度を育成する。 |
| 具体的取組 | 進路だよりを計画的に発行し，様々な情報を適切な時期に伝えていく。また、特活、総合的な学習の時間を中心に全教育活動を通してキャリア教育を行うための全体計画を作成し、３年間を見通した指導を推進していく。 |
| 担当 | 進路指導主事・各学年進路担当 |
| 現状及び取組状況 | 1年生では、働く意義について、2年生では、職業の選択について取り組み、３年生での体験入学や進路学習会を中心に進路指導を行っている。 |
| 評価の観点 | （成果指標）様々な活動を通して自分の将来について意欲的に考える生徒が増えた。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 学習・生活アンケート（生徒③）「将来の夢や目標を持っている」が、　A 85%以上の場合　B 70%以上の場合　C 60%以上の場合　D 60%未満の場合 |
| 判定基準（備考） | Dの場合は、指導体系・方法を再検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **1年生 B(81.8%), 2年生 B(71.2％)、3年生 B(76.8%)** |
| 分析（成果と課題） | 成果として、3年生での夢授業の実施やライフプランニング授業を行えたため、将来に対して考える機会を増やすことができた。しかし、Aに達成できておらず、1,2年生では、前期には総合でキャリア教育を行わず、後期からキャリア学習を行うことが課題である。 |
| 今後の改善策 | 1年生では今後進路コンパスを用いた授業や、働くことの意義について考えるキャリア教育を行っていく。2年生では、３学期に進路についての話から、職業の選択について考える場を設ける。3年生では、夢授業として、高校の先生から話をきく。また、高校卒業後の進路をみすえて懇談を行っていく。 |
| 集計結果（％）（最終） | **1年生 B(82.0%), 2年生 C(60.8％)、3年生 A(93.3%)** |
| 中間結果との差（％） | 1年生(＋0.2%), 2年生(―10.4%), 3年生(＋16.5%) |
| 分析（成果と課題） | 3年生では、夢授業や、進路について考える機会が多くあった。また、高校進学に向けて、自分の高校卒業後の姿をみすえた面接練習など効果があった。1・2年生では、将来について考える機会が少ないことが課題である。2年生では、生活アンケート項目“自分には、良いところがあると思う”の％が下がっており、ここから将来への不安がみられる。 |
| 次年度への改善策 | 高校進学だけではなく、進学後の自分の姿をみすえた指導をはやめに、特に現2年生は4月からしておくとよい。 |
| 評価の項目 | ④　保健管理 |
| 今年度の重点目標 | 基本的生活習慣を定着させる。特に歯や口の健康づくりや睡眠時間の改善を図る。 |
| 具体的取組 | 生徒保健委員会の活動で、正しい生活習慣に関する知識を広めたり、母親委員会との協力で家庭との連携を考えていく。また、学校保健委員会等で家庭・地域と情報を共有し、基本的生活習慣の定着につなげる。 |
| 担当 | 保健主事 |
| 現状及び取組状況 | むし歯の治療率は年々高まってきているが、春の検診で再びむし歯になっている生徒が多い。またTV・ゲーム・ネットなどで睡眠時間が少なく体の不調を訴える生徒がいる。 |
| 評価の観点 | （成果指標）むし歯の治療率が向上したか。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 歯科検診でむし歯があった生徒の治療率が、　A 90%以上の場合　B 80%以上の場合　C 70%以上の場合　D 70%未満の場合 |
| 判定基準（備考） | むし歯治療済みカードの回収率。C・Dの場合は、取り組み方を検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **C（７９．２％）** |
| 分析（成果と課題） | 今年度の歯の検診結果でむし歯のない者の率（46.0％）と治療済者の率（41.2％）が高く、毎年むし歯治療を呼び掛けてきた成果が少しずつ出てきている。しかし、治療が必要な生徒の9月までの治療率が80％にとどいていなく、また今年度検診時の欠席者の未受診者もいることから、共に生徒への個別指導と保護者への理解を求め、受診を促していく必要がある。 |
| 今後の改善策 | ・生徒保健委員会での歯の健康とむし歯治療促進活動・未受診者への個別指導 |
| 集計結果（％）（最終） | **B（　８１．８％）** |
| 中間結果との差（％） | **＋２．６％** |
| 分析（成果と課題） | 夏休みが終わるまでに治療につなげることを意識し、生徒への声掛けや保護者への働きかけを担任と連携したことで、少しずつ受診率も上がり成果が現れてきた。しかし今年度、コロナ禍や不登校で歯科検診欠席多く、当日検査ができなかった生徒への対応も考えていく必要性がある。 |
| 次年度への改善策 | 歯科検診終了後直ちに学校歯科医・担任と連携し、未検診者及び治療が必要な生徒への個別指導を行う。また、生徒保健委員会での学級指導を考えていく。 |
| 評価の項目 | ⑤　安全管理 |
| 今年度の重点目標 | 校内の避難経路の確保と日頃の安全管理に務める。 |
| 具体的取組 | 校内の危険箇所を把握し、防災教育を通して生徒の防災意識を高揚させる。 |
| 担当 | 教頭・防災安全担当 |
| 現状及び取組状況 | 校内の危険箇所を把握していながらも、その解決にまでいたっていない。 |
| 評価の観点 | （成果指標）安全点検によって危険箇所が改善されているか。また適切な防災教育が行われたか。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 教職員アンケート（教師㉖）で「職員が避難訓練や研修等を通じて、災害行動マニュアルを理解できた。」が、　A 80%以上の場合　B 70%以上の場合　C 60%以上の場合　D 60%未満の場合 |
| 判定基準（備考） | C・Dの場合は、方法・内容について再検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **Ａ（95％）** |
| 分析（成果と課題） | 1学期にも地震および火災の避難訓練を行い、確認する場面が多かったことで、災害行動マニュアルを理解することができた。今年度も、2学期は生徒の防災委員と連携して避難訓練を行い、生徒と教師の両方の目線で災害対策を考えていく。安全点検も定期的に行い、危険箇所の確認ができている。予算の関係もあるが、修理できる部分から改善していく。 |
| 今後の改善策 | ・生徒の防災委員と連携した避難訓練・危険箇所の把握と早急な修繕・修理 |
| 集計結果（％）（最終） | **Ａ（94％）** |
| 中間結果との差（％） | **－1％** |
| 分析（成果と課題） | 2学期の避難訓練は、3年生の防災委員が誘導を行い、災害への知識や対策などについて説明することで、生徒の災害への意識が高まった。また、2年生の総合的な学習の時間において防災学習を行っている。安全点検から出てきた危険箇所や修理が必要な箇所を把握し、危険度の高いものから修理ができた。（修理費が高額なものは、市教委へ連絡しお願いしている。） |
| 次年度への改善策 | ・2，3年生における防災学習を継続し、自ら判断し行動できる力を育成する。（3年生は修学旅行での学びを生かす）・危険箇所については、状況の把握とともに修繕・修理を進める。大きな修繕等は市教委へ早急な対応を強くお願いする。 |
|  |
| 評価の項目 | ⑥　特別支援教育 |
| 今年度の重点目標 | 校内委員会を月に一回程度開催し、情報交換や生徒理解に努め、個々に応じた効果的な支援について検討する。 |
| 具体的取組 | 校内委員会や研修会を通して、全教職員で共通理解を図る。学年会や生徒指導委員会、教育支援員、SC、専門相談員等と連携してより具体的に個々の支援の方法、内容、変容効果について検証し、実践していく。 |
| 担当 | 特別支援コーディネーター（生徒支援委員会） |
| 現状及び取組状況 | 事例検討会や校内研修会を開催し、支援の方法を検討している。 |
| 評価の観点 | （成果指標）生徒は学校が楽しいと感じているか。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 学習・生活アンケート（生徒⑱・②）で「学校に行くのは楽しいと思う」と「先生はあなたのよいところを認めてくれている」が、　A 90%以上の場合　　　　　　B 85%以上の場合　C 80%以上の場合　　　　　　D 80%未満の場合 |
| 判定基準（備考） | 一方でもDの場合は、原因を分析し、取組を検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **「学校に行くのは楽しい」　89.6％（B）****「先生はあなたのよいところを認めてくれる」　90.3%(A)** |
| 分析（成果と課題） | 昨年「学校に行くのは楽しい」のポイントが低かった2年生が4ポイント上昇したり、1年生のポイントが高かったりしたことにより、A基準には0.4%届かなかったものの達成度は高かったといえる。また「先生は自分のよいところを認めてくれる」の項目においては1年生と3年生で90%を超えているものの、2年生では78.9%となっている。不適切な行動などで生徒へ指導を入れる場面が多かったためだと考えられるが、2学期に入り成長した姿が見られることから、2学期での向上が期待できる。 |
| 今後の改善策 | みんなで行う行事などを苦手とする生徒が見られるが、それぞれの生徒の考えを認めつつ、他者とのかかわりを経験させ、行事の楽しさを味わわせてあげたい。 |
| 集計結果（％）（最終） | **「学校に行くのは楽しい」　86.7％（B）****「先生はあなたのよいところを認めてくれる」　93.6%(A)** |
| 中間結果との差（％） | **「学校に行くのは楽しい」　-2.9％****「先生はあなたのよいところを認めてくれる」+3.3%** |
| 分析（成果と課題） | 「学校へ行くのは楽しい」の項目については３年生が0.5p上昇したものの、1年生で-6.3p、2年生で-2.1pだったため、トータルで-2.9pとなった。1年生の下降率が大きいのは女子の人間関係の変化と学習についていけなくなった生徒が増加したことによるものと推測できる。「先生はあなたの良いところを認めてくれる」については全校で＋3.3pとなった。1年生は+0.2pと微増だが、2年生では+13.2pとなるなどPBSの効果が出ていると考えられる。3年生の評価が-4.3pになっているのは1学期の結果が97.7pだった事と、進学が具体的になった事が要因と考えられる。 |
| 次年度への改善策 | 特に1年生での学力の保障や人間関係の変化を細やかに見取ってサポートすることが必要であると考えられる。また、PBSの継続も効果があると考えられる。 |
|  |
| 評価の項目 | ⑦　組織運営・業務改善 |
| 今年度の重点目標 | 働き方改革を通して教育の質の向上を図る。 |
| 具体的取組 | 校内研修会などを通して、全教職員で共通理解を図る。校務分掌をチームで分担し、効率化を目指す。 |
| 担当 | 業務改善チーム |
| 現状及び取組状況 | 働き方改革を意識しながら業務を行っているが、超過勤務時間が80時間を超える職員が数名いる。 |
| 評価の観点 | （成果指標）勤務時間を意識し、働き方改革が行えているか。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 職員の超過勤務時間の平均80時間以下の人数が　A 80%以上の場合　B 70%以上の場合　C 60%以上の場合　D 60%未満の場合 |
| 判定基準（備考） | C・Dの場合は、原因を分析し、次年度の校務分掌や業務内容を検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **全職員が１学期間超過勤務時間の平均が80時間以下であった。（100%）** |
| 分析（成果と課題） | 4月、5月は80時間を超えている職員が複数確認できるが、7月、8月は比較的超過勤務時間が少ないため、平均では80時間を超えていなかった。一方で、校務分掌により、超過勤務の割合が異なっている。 |
| 今後の改善策 | 職員会議のデータ化を通して、職員会議時間の削減を行う。 |
| 集計結果（％）（最終） | **全職員が１学期間超過勤務時間の平均が80時間以下であった。（100%）** |
| 中間結果との差（％） | 超過勤務時間が中間に比べ勤務時間が増加した人数は7人(35%)，減少した人数は9人(45%)，変化がない人数は4人(20%)であった。 |
| 分析（成果と課題） | 中間と比較して，超過勤務時間が減少した職員の方が増加した職員より多く，全職員の合計超過時間も減少した。２学期は大きな行事があったが、一人一人が意識することで改善してきている。一方、校務分掌によって改善が難しい職員もいる。 |
| 次年度への改善策 | ・職員一人一人が改善意識をもつ。・教務内容の削減。 |
|  |
| 評価の項目 | ⑧　研修 |
| 今年度の重点目標 | 生徒がわかった、できた、もっとやりたいと感じられるように授業改善を行い、学習意欲と学力の向上を目指す。 |
| 具体的取組 | 生徒がわかったと感じる機会を増やし、学習意欲と学力の向上を図るために、各教科・領域・学年で工夫している内容を提案授業、研究授業、互見授業から学び合い、授業改善につなげる。 |
| 担当 | 研究主任 |
| 現状及び取組状況 | 教科の枠を越えた授業研究、互見授業を実施している。生徒が学ぶための土台をつくる、授業規律の確立を行っている。 |
| 評価の観点 | （成果指標）わかった、できた、もっとやりたいという生徒の学習に対する意識を高められたか。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 学習・生活アンケート（生⑰）「授業の内容がわかりやすい」が　A 90%以上の場合　　　　　　　　　B 80%以上の場合　C 70%以上の場合　　　　　　　　　D 60%未満の場合 |
| 判定基準（備考） | C・Dの場合は、原因を分析し、次年度の研修内容を検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **今年度　１年94.9％　２年86.5%　 3年95.4%****昨年度　１年89.3%　 ２年85.8％　3年88.5%****１年　A　　 ２年　B　　 3年　A** |
| 分析（成果と課題） | 前年度よりアンケート項目の数値が向上している。復習の効果や先生方が生徒の授業がわかったということにアプローチしようと授業改善に努めていることがわかる。２年生に関しては、授業規律も含め根気よく、また生徒の実態に合わせてアプローチしていく必要性がある。 |
| 今後の改善策 | 互見週間を行い、授業改善のきっかけとなる機会を設ける。また、授業での復習を継続して行い、２学期からは授業でつけさせたい力、単元のゴールを教員間また生徒と共有し、ゴールを明確にした授業設計を心掛けていく。 |
| 集計結果（％）（最終） | **2学期　１年90.1％　２年91.1%　 3年95.5%****１年　A　　 ２年　A　　 3年　A** |
| 中間結果との差（％） | **1年　-4.8％　2年 +4.6％　3年 +0.1％** |
| 分析（成果と課題） | 全教科が復習から行うことで、生徒の「わかった」を一つでも多く授業に組み込むことができた。学習規律を確立していく中で、授業内容の定着につながった。学習内容を定着させるための反復練習やアウトプットを意識した単元計画を作成する。また学習に向けての動機づけを行っていく必要がある。 |
| 次年度への改善策 | ・単元計画を意識した授業設計・協働的な学びを通して、知識を深化させていく。・家庭学習でのreadinessの確立 |
|  |
| 評価の項目 | ⑨－１　保護者、地域との連携 |
| 今年度の重点目標 | 学校の情報公開を充実させ、保護者や地域の方との連携を深める。 |
| 具体的取組 | 学校の情報を保護者に知らせるためにメール配信を活用し、全員のメール配信登録を目指す。学校からの連絡が確実に保護者に渡るように呼びかけていく。 |
| 担当 | 教頭・情報担当 |
| 現状及び取組状況 | ＨＰだけでなく、メール配信で学校の状況を伝えていく。ＨＰやメール配信等の内容の充実を図っていく。 |
| 評価の観点 | （成果指標）担当者を中心に、充実したＨＰの更新ができていたか。またメール配信が適宜･適切に行われていたか。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 保護者アンケート（保護者①）で「学校だよりやＨＰ等で学校の様子がわかる。」が　A 90%以上の場合　　　　　　　B 80%以上の場合　C 70%以上の場合　　　　　　　D 70%未満の場合 |
| 判定基準（備考） | C・Dの場合は、方法・内容について再検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **Ｃ（1年79％、2年72．5％、3年82．3％）** |
| 分析（成果と課題） | 学校からの情報や生徒の活動の様子をホームページや配信メールで発信しているが、保護者にとっては多くの様子を知らせてほしいとの思いがある。学年便りなども見たいとのコメントもあった。（個人情報で難しいと理解しているが。） |
| 今後の改善策 | ホームページでは新しい内容や生徒の様子をアップしていくことに努める。配信メールでは、各学年や部活動単位でのものをうまく活用し情報発信に努める。また保護者に渡したお便りなど必ず目を通してほしい内容についてはＰＤＦ形式で添付するなど、丁寧で確実に知らせる方法に取り組んでいく。 |
| 集計結果（％）（最終） | **Ｃ（1年72.4％、2年72.8％、3年79.2％）** |
| 中間結果との差（％） | **1年―6.6％、2年＋0.3％、3年―3.1％** |
| 分析（成果と課題） | ・ホームページは毎日更新されているが、部活動の予定などについて早急な更新ができていない項目もある。・配信メールについては、保護者の行事等の参加に関する内容を直前に送っている。2学期からはお便りなどもＰＤＦとして添付し、手元に届いていない家庭にも分かるようにした。 |
| 次年度への改善策 | ・ホームページは、情報の更新に気を付ける。・配信メールでは、行事やアンケート等で早めの情報発信を行っていく。デジタル化を進めながら、丁寧に配信していく。 |
|  |
| 評価の項目 | ⑨－２　保護者、地域との連携 |
| 今年度の重点目標 | 学校運営協議会の設立に向けて準備を行う。 |
| 具体的取組 | 学校運営協議会の設立に向けての会議や研修を進める。 |
| 担当 | 学校運営協議会準備委員会・教頭 |
| 現状及び取組状況 | 学校運営協議会が設立されておらず、職員にも周知されていない。 |
| 評価の観点 | （成果指標）学校運営協議会の準備委員会の進捗状況と協議会について職員に周知されたか。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 教職員アンケート（教師㉘）で「学校運営協議会について周知され、準備が進められた。」が　A 80%以上の場合　B 70%以上の場合　C 60%以上の場合　D 60%未満の場合 |
| 判定基準（備考） | C・Dの場合は、方法・内容について再検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **Ａ（80％）** |
| 分析（成果と課題） | 学校運営協議会（コミュニティスクール）の意味が十分に浸透していない。来年度からどのように運用されていくのか、まだ不透明な部分がある。 |
| 今後の改善策 | 学校運営協議会（コミュニティスクール）について理解する校内研修を行い、先進校などの取組を知る場を設ける。2学期後半から次年度に向けての準備に取りかかる。 |
| 集計結果（％）（最終） | **Ａ（88％）** |
| 中間結果との差（％） | **＋8％** |
| 分析（成果と課題） | 学校運営協議会（コミュニティスクール）については、職員会議で説明したことで職員の理解は少し高まった。しかし、コーディネーターの選定についてはっきり決まっていない状況であるため、まだ分からないことが多い。これから研修等を設け、コーディネーターの選定を丁寧に行っていく。 |
| 次年度への改善策 | ・先進校の取組から学び、学校運営協議会（コミュニティスクール）についての校内研修を行う。・本校の特色を生かしながら、どのようなことが取り組むとよいか考え、計画する。 |
|  |
| 評価の項目 | ⑨－３　教育環境整備 |
| 今年度の重点目標 | 授業でのＩＣＴ活用の推進 |
| 具体的取組 | ＧＩＧＡ研修を行うことや、ＩＣＴ機器の操作方法を理解し、授業で適切に活用できるように取り組む。 |
| 担当 | ＧＩＧＡ担当者・教頭 |
| 現状及び取組状況 | 一人一台のＰＣが配備され、授業および朝礼等で使用はしているが、その使用には個人差があり、ＩＣＴ機器の効果的な活用にはいたっていない。 |
| 評価の観点 | （成果指標）アプリケーション指標項目１０個のうち、いくつ授業で活用できるようになったか。 |
| 実現状況の達成度判断基準 | 教職員アンケート（教師㉙）で「アプリケーション指標の中で、授業でいくつ活用できたか」の個数が　A ６個以上の場合　B ５個以上の場合　C ４個以上の場合　D ４個未満の場合 |
| 判定基準（備考） | Dの場合は、方法・内容について再検討する。 |
| 集計結果（％）（中間） | **A・B・Cの4個以上か通できた教員は68%、Dの4個未満の教員は32%であった。** |
| 分析（成果と課題） | 7割の教員がICTを積極的に活用している。しかし、4個未満の教員も3割である。9月にミライシードの利用方法を研修したため、2学期にその活用が期待される。 |
| 今後の改善策 | 互見週間を通して、ICTを活用している授業見たり、研修で活用方法を学ぶことによってICTの活用率を上げていきたい。 |
| 集計結果（％）（最終） | **A・B・Cの4個以上か通できた教員は66.7%、Dの4個未満の教員は33.3%であった。** |
| 中間結果との差（％） | 4個以上は1.3%減少。4個以下は1.3%増加した。 |
| 分析（成果と課題） | 中間と比較して大きな変化はない。２学期はミライシードの使い方を研修した。その後活用する教員も増加した。使うことはできても授業に生かすことができていない職員もいると考えられる。 |
| 次年度への改善策 | ・水曜日の放課後を活用するなどして研修の時間を確保していく。・ICT支援員の支援を積極的に受ける。 |